巻　頭　言

表面分析って何だろう

副　島　啓　義

「もの」がものとして認識されるには他との境界があって周囲と区別がつくからであろう。その境界——界面——はその「もの」の表面ということになる。つまり，ものがあるなら表面がある。表面がない（わからない，表現できない）ならものが認知できない，といったらいいすぎか。表面がないのは宇宙くらい？

表面という言葉を辞書で引いてみると，『表：毛と衣から成る，毛はつつむ意の語源である包からきている，つつむ衣からおもてを意味する，明らかに人に知らせる意もある。面：あたま（首）をおおっているさまを示す古い字体から変化した文字，かぶるお面，おもて，顔をそむける意もある。』また，surface は『sur と face。sur：上の，超の，super と同意語，たとえば surcoat（中世騎士のよろい，中世の体にぴったりした外衣），surcharge（積みすぎ，過充電，追加料金）。face：顔つき，面目，厚顔，見せかけ，困難などを直視する，危険・敵に敢然と立ち向かう。』といった説明が記されている。なかなか面白いのは動詞としての意味である。少々拡大解釈するなら，分析という言葉をつけなくても「表面」だけで状況・行動を示すことができそうで，「超厚顔」「超見せかけ」「表面がどうなっているかを人に知らせようとしたら顔をそむけられた」などといったちょっとひねくれたものや，「表面の解明に，困難をものともせず敢然と立ち向かう」というカッコいいものなどが浮んでくる。

仕事がら表面分析について話すことや，材料関係・分析関係の方々に接することも多いが，さすがに表面に顔をそむける方は皆無である。ただ，表面分析は手法を表わした分類名ではなく，目的を表わしたいい方であるので，手法に限りはない。したがって何かひとつでも表面分析手法を知れば，表面分析分野にたずさわったことになるが，表面分析法を極めることなど考えると気の遠くなるような研究対象・仕事量・努力量が待ちかまえている。なにせ，現在の手法の能力向上のみならず，新たな多くの原理・手法の出現も期待されている分野なのだから。表面のことが知りたくて，中にとびこんだら，表面から出られなくなる事態が起きるかも。と溜息のひとつくらい出ても不思議ではない。

「表面」から何を思うかは人さまざまであろうが，表面科学・表面分析関係者の果敢なる努力で「表面」の実体がかなり見えてきた。そしてその分だけ新たな疑問と課題も生まれてきた。内には無限のエネルギーを秘めつつも，表面的にはなにげなくさりげなく，ジョークの3つ4つ5つ6つも飛ばしながら，楽しくやっていきたいものである。

（(株)島津製作所）